

わい化病（キクわい化ウイルス：CSVD）



CSVDの感染で生育が不揃いとなる



左：正常株 右：CSVD感染株

【見分け方】

本病に感染したキクは、葉がわずかに淡緑化し、茎との角度が小さくなり直立して生育する傾向があり、大きさも小型化する。大きな特徴として、節間が短縮してわい化することで見分けることができる。花は小型化、退色（特に赤色系の品種）、開花の早期化（7～10日）などがみられる。また、挿し穂は発根不良になる。生育障害の程度は品種によって大きく異なり、わい化症状を示さない無病徴の品種も多いことから、肉眼により判別できる範囲で調査し対処する。

【発生生態】

第一次伝染源は無病徴株を含めた病株で、苗購入に伴う持ち込みが多く、新品種の導入や親株の更新時にほ場に持ち込まれる。また、摘蕾、切り花、刈込みなどの作業に伴って刃物伝染が起こる。虫媒伝染、土壌伝染は認められない。気温の上昇とともに感受性品種ではわい化症状が現れる。

